

なぜ、漁獲量は減ったか - 3

イサザアミ

イサザアミの漁獲量は図1に示したように、多い年には霞ヶ浦で約3100トン（昭和51年（1976））、北浦では約760トン（昭和45年（1970））もあり、霞ヶ浦北浦では重要な位置を占めていました。

しかし、図にもみられるように、霞ヶ浦北浦ともに漁獲量は減少し、平成6年（1994）には霞ヶ浦で215トン、北浦では36トンと激減しており、先の最大漁獲量との差は、霞ヶ浦では約2800トン、北浦では約700トンと、大変大きな量となっています。

これは最大漁獲量との差ですが、昭和50年代初期の平均的な漁獲量（霞ヶ浦で約1500トン、北浦で約400トン）と比較しても、霞ヶ浦で約1300トン、北浦で約360トンの漁獲減となっています。

イサザアミについては、幾らか塩分がないと生息できないとされているため、逆水門の操作による漁獲量の減少は、予想されてはいました。

霞ヶ浦湖心の塩素量の推移を、図2に示しましたが、水門が完全に操作された、昭和51年（1976）以降の塩素量は、約40~50ppmと一定になっています。

このような塩素量の低下傾向は、北浦でも全く同様の状態ですので、特に示しませんでした。

このように塩素量が大変低いために、湖内の塩素量が降雨量によって簡単に影響を受け、図3に示したように、大雨が降ると塩素量は20~30ppm程度まで低下し、川が渇水時には逆に塩素量が高くなります。

このことは現在の霞ヶ浦北浦の塩素量は、湖底泥からの塩素量の溶出によって、維持されていることを示しています。

図にもみられるように、湖内の塩素量は水門操作後、徐々に低下している様子が見えます。

したがって、今後も両湖の塩素量は、次第に低下して行き、流入河川水の塩素量（約10~20ppm）に近づいて行くものと思われます。

なお、この塩素量の低下は、湖の地形的な差異から、霞ヶ浦より北浦の方が、より影響を受けやすいものと考えられます。

イサザアミ漁獲量の減少が、霞ヶ浦より北浦で、数年早くからみられているのは、このためではないかと推測しています。

このように湖内の塩素量は、今後、次第に低下して行くことが予想されることから、塩素量に影響を受けると、考えられているイサザアミの漁獲量は、非常に不安定なものになるとみざるを得ません。

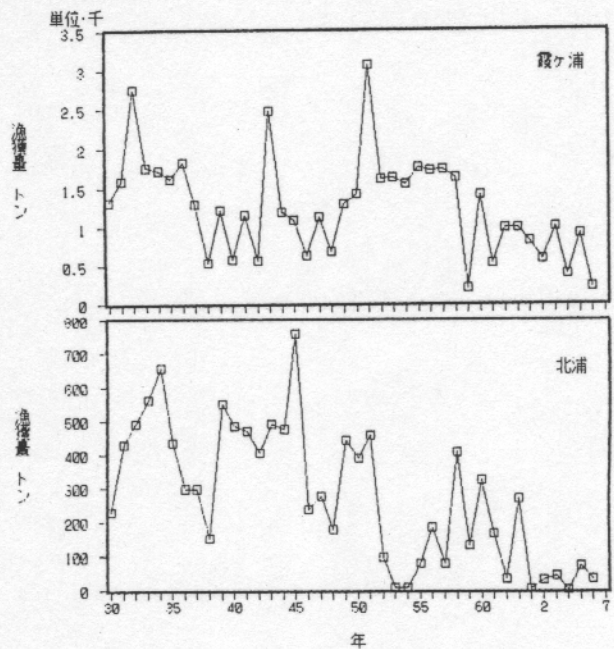


図1 イサザアミの漁獲量の推移

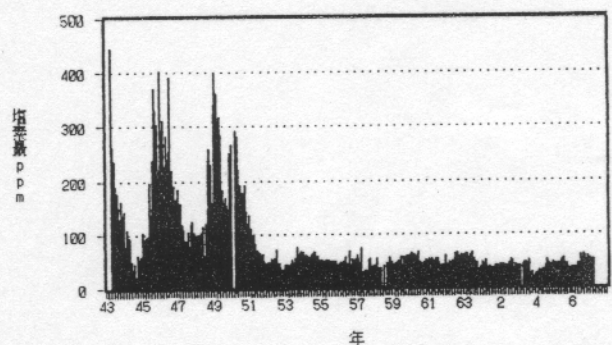


図2 塩素量の変化（霞ヶ浦・湖心（表層））

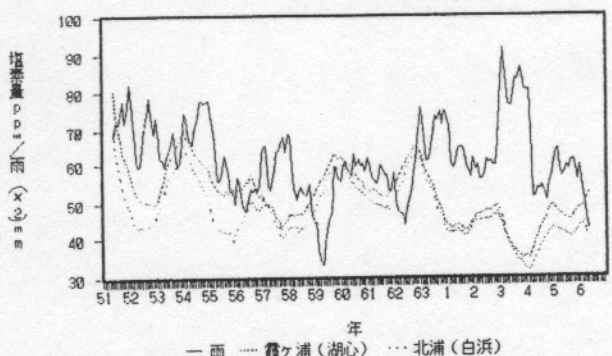


図3 湖内の塩素量と降雨量の関係（移動平均値）
塩素量：霞ヶ浦・湖心（表層）
降雨量：美野里（気象月報）